

# コメントライナー

第6352号

2017年12月18日(月)

## ◎共感を呼ぶ言葉、反発を呼ぶ言葉

言の葉OFFICEかのん代表 川邊 暁美

### ◆失言の上塗り 根底にあるのは

2017年の流行語大賞の一つに、森友・加計問題で注目を集めた「忖度」が選ばれた。「忖度」は「察しの文化」である日本ならではの言葉でもあり、本来は悪いイメージの言葉ではないのだが、今年、多用されたシーンの影響で「強い者の意向を慮って異例の配慮をする」というニュアンスで定着した感があり、うっかり使えない言葉になってしまった。

今年も政治の世界から世間を騒がせる言葉が多く飛び出した。失言・暴言も多かった。4月に辞任した今村元復興大臣。「(原発被災者の避難先からの帰還問題は)自己責任だ」「(記者に対して)うるさい」と暴言を放った激高記者会見で注目を集める中、「(震災が起きたのが)東北で良かった」とさらに許されない言葉を口にし、更迭。政権に打撃を与えた。

なぜ、わざわざ失言の上塗りをしてしまったのか。根底には「本人がそれを失言だと自覚していない」と「自分自身の立場がわかっていない」という「世間との感覚のズレ」がある。失言した後に慌てて「そういう意味ではなかった」などと釈明しても、逆に、人権意識の希薄さや言葉に対する鈍感さ、責任の無自覚を露呈することになってしまう。

### ◆大切なのは「目線」の位置

言葉の選び方一つで流れが変わってしまったのが、先の衆院選で「希望の党」を率いた小池都知事だ。小池都知事は、これまで言葉の使い方が実に巧みであった。古くは環境大臣時代の「クールビズ」、防衛大臣時代の「女子の本懐」。そして、都知事になってからの「守るべきものは断固として守り、変えるべきものは勇気を持って変える」「都民ファースト」など、その場に応じて、スマートな語感の言葉あり、力強いリーダーシップや勇気・覚悟を感じさせる言葉あり、と使い分けながら、多くの人の印象に残る、新鮮で共感を得る言葉を発信してきた。その言葉が受け止める側にどう取られるか、「相手目線」に立ち、受け止めやすいポジティブな言葉選びがなされているのだ。

が、「排除」はその言葉を発する自分目線に立った言葉だ。上から目線のネガティブな言葉であり、反発を生んでも仕方がない。

### ◆「謙虚」「丁寧」も押しつけでは・・・

違和感を抱かせる言葉と言え、今年も不祥事を起こした組織のトップによる記者会見が多かったが、冒頭に「この度は大変なご心配を掛け・・・」とお詫びするのはいかがなものか。「ご心配」ではなく、まず「ご迷惑」とするのが謙虚な反省の弁であると思う。

「謙虚に」を国会で多用したのが安倍首相。森友・加計問題に対して「謙虚に」「丁寧に」と繰り返し強調していたが、「謙虚」も「丁寧」も押しつけるものではなく相手に感じてもらうもので、自分からアピールするのは逆に傲慢な印象を与えてしまうので気をつけたい。

言葉は受け止める相手次第。真意と違っていても相手が受け止めたこと、伝わったことが全てだ。言葉の表現を吟味する際に「自分目線」ではなく、「相手目線」で考えて選ぶことが大切だ。それこそ「忖度」か。  
(かわべ・あけみ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003